

2022. 6. 5. 主日礼拝説教
聖書： マルコによる福音書 12章 41～44節
『献げるという行為』

本日の聖書の箇所は「やもめの献金」という小標題が始めに掲げられています。わたしたちは今時やもめなどという言葉は口にすることはありません。しかし、その内容は連れ合いと死別して経済的に困窮している孤独な女性の姿を思い浮かべてしまいます。又、反対に「男やもめ」なる日本語には、糸の切れた風船のように気ままな男の一人暮らしを連想させます。このように同じ単語でも対象が女性か男性かという性差によって受ける意味合いが少し違って来る言葉があります。果たして「やもめ」という言葉が適切な翻訳かというところとあやしいことと言わざるを得ません。

原文では当時何らかの理由で一人暮らしをしている成人女性を十把一絡げにしてこのように呼んだようです。ですからこの言葉のもとに皆が同じ境遇であったというわけではありません。そのためここで登場してくる女性にはあえて「貧しい」(42,43)、「乏しい」(44)という言葉が付け加えられました。なぜなら、40節では「やもめの家を食い物にし」と書かれている位ですから財産を譲り受けた大金持ちの女性もたくさんいたということなのです。

実は今日の聖書の箇所は、一つ前の「律法学者を非難する」という38～40節の直後に置くことによって、律法学者たちとこの女性がいかに対照的かを示しているのです。つまり、マルコはユダヤ教指導者たちと一般の人々をはっきり区別して福音書を書いたということなのです。このことは、初代教会が指導者と一般の人々のどちらと共に生きるのかという自問自答なのです。

そして、この問いと答が福音の質なのだと言っているのです。

さて、物語は多くの金持ちに対比して、貧しい女性の献金額が問題視されます。レプトン銅貨とは最小単位の貨幣でした。レプトン2枚で1クアドランスと記されます。クアドランスはローマの青銅貨で、1アサリオンの四分の一にあたります。1アサリオンとはマタイ10;29では2羽の雀、ルカ12;6では5羽の雀の値段です。

その女性は神殿の「女性の庭」の壁に置かれた13個のラッパ型の「さいせん箱」に微々たる額ですが、彼女は持っている貨幣のすべてを捧げたのです。

そしてこの片隅にしか過ぎない行為にイエスが眼差しを注がれたというのです。

43 節で「弟子たちを呼び寄せて」と述べられます。これはマルコの常套句です。「弟子たち」というのは「教会」という意味です。すなわちこの女性の行為は教会への教育として提示されたものだということなのです。

はたして、持っている物すべてを捧げるなどという行為とは何なのでしょう。そんなことが可能なのでしょうか。それが捧げるという行為の究極の姿なのでしょう。

そうではありません。誤解を生まないようにマルコはわざわざ「持っている物すべて・生活費全部」と書いています。そんなことを実際に行うのは破綻であるということです。そうではなく、イエスが認められたのは「有り余る中から」ではなく「乏しい中から」という事柄なのです。

初代教会は互いに乏しい中から愛し、慰め、支え合う課題を模索して来ました。それだけが人を神の前に歩ませる原動力なのです。捧げて乏しくなるのではなく、乏しいがゆえに捧げることが初めて出来るのです。